

日本語教育におけるディクトグロス用教材作成のための 基礎的研究

荻原 廣

0. はじめに

ディクトグロス (Dictogloss) とは、桑戸 (2007) によると、「あるまとまりのある文章を聞き、書き取った内容語のメモを頼りにペアまたはグループで元の文章を復元していく活動のこと」である。(1)

また、染谷はディクトグロスの特徴として以下のように述べている。(2)

Dictogloss はリスニング、スピーキング (ディスカッション)、リーディング、ライティングの4技能にかかわる作業をひとつの課題の中で行わせることができる統合的学習法 (integrated learning/teaching method) であり、さらに、現在の第二言語習得論の中心的概念・理論を、教室での教育実践の中に統合的に取り入れることのできる学習法・指導法として注目されている。

本研究では、まずこのディクトグロスの実践例を紹介し、次に先に教材化されたものの問題点を探り、最後に、教材化するにはどういった基準が必要かについて考察する。

1. ディクトグロスの実践例

ディクトグロスは、もとは英語教育から生まれ、その後、日本語教育にお

いても取り入れられるようになったが、その実践例は必ずしも詳しく説明されているとは言えない。たとえば、横山(1998)は、Wajnyrb の論文(3)を引用する形で、ディクトグロスのやり方を次のように紹介している。

- ①教師は、焦点を当てたい文法項目を含んだ比較的短いテキストを用意し、そのテキストを普通のスピードで声を出して2回読み上げる。
- ②テキストが読まれている間、学習者はメモをとる。
- ③その後、学習者はとったメモや記憶をもとに、ペアでテキストの再生をする。(内容的にも言語的にもできる限り正確に再生するように指示する)

ただ、これだけではやり方の説明が簡単すぎて、実際にどうやっていいのか分からないのではないだろうか。そこで、染谷が青山学院大学における英語の授業で実際に行っている「ディクトグロスのやり方」(4)を以下に紹介したい。

Part 1 (10 分)

1. まず、課題文(英文)を3回繰り返して聞きます。
 - 1 回目は黙って聞き、全体の概要をつかんでください。
 - 2 回目と3 回目は各自小さな声でシャドーイングしながら聞きます。※シャドーイングとは、聞いたことを(元の音声に少し遅れて)そのまま声に出して復唱することです。
2. 次に、もう一度聞きます。今度はワークシートの左側の欄(Notes の欄)にキーワードをメモしながら聞いてください。
3. 最後に、もう一度音声を流しますので、メモを補足してください。

Part 2 (20+30=50 分)

4. 聞き取りが終わったら、今度はメモをもとに、各自、元の英文の内容を全文、英文で復元します。英文はワークシートの右側の欄

(Text Reconstruction の欄) に記入します。

※復元した英文は、意味内容が正しく再現されている限り、必ずしも原文と全く同一でなくてもかまいません。

5. 各自英文を書き終えたら、指定されたペアまたはグループになって、今度は共同で英文の内容を検討します。意味の通らないところはないか、抜けている情報はないか、文法的に間違いがないかといった点を比較検討しながら、最終的にペアまたはグループとして、完全な英文トランスクリプションを完成させてください。

Part3 (25+5=30 分)

6. 完成した英文のうちいくつかを例にとってクラス全体でレビューします。自分たちのグループが気がつかなかったこと（特に文法上の間違い）に注意しながら、先生のコメントや他の生徒の意見を聞きましょう。
7. 最後に、この練習で学んだこと、気づいたこと、次の練習の時に注意したいと思ったことなどを、各自、自分のワークシートの空いているスペース（または裏面）に記入してください。ワークシートは最後に回収します。
8. 最後に、復習クイズ (Review Quiz) をします。
※時間がない場合は宿題になります。

※初級編 90 分授業を想定

以上であるが、この英語教育で行われているディクトグロスのやり方は、「英文」→「日本語文」とすることで、そのまま日本語教育にも応用可能であろう。実際、現在、私が行っているディクトグロスの授業は、この染谷のやり方のうち、1～7について、「英文」→「日本語文」として行っている。

なお、ワークシートは、参考までに、資料として最後に付ける。

2. ディクトグロスとアカデミック・ジャパニーズ

ディクトグロスとは、その授業を通して、言いたいことと言えこととのギャップに気づくことにより新しい知識を得たり、また仮説検証により今までの間違いを修正したりすることによって、日本語の能力を伸ばすことができるとされているが、それ以外にも、アカデミック・ジャパニーズにおける2つの学習スキルを獲得するための練習になるであろうと思われる。

1つは、ワークシートにキーワードをメモしながら聞くという部分で、これは、大学におけるノートテキングの練習になる。そしてもう1つは、各自、文を書き終えた後、指定されたペアまたはグループになって、共同で内容を検討するという部分で、これはピア・ラーニングの練習になる。

なお、これら2つのスキルは、本来、日本語学習機関にいる段階で身につけておいたほうがいい。なぜなら、第一に、日本語学習機関では、日本語の講師が丁寧に板書、説明をしてくれ、質問にも答えてくれるのに対し、大学では、講師が一方的に話し、それを学生はメモするという形式が多く、こうした授業におけるノートテキングの技術がないと、進学後、とまどうこととなるからである。第二に、日本語学習機関では、教師、学生間のインターアクションが中心であったのが、大学ではゼミ等で、日本人学生、または他国の学生とのインターアクションが増えるため、ピア・ラーニングを全くしたことがないより、したことがあるほうが、スムーズに大学での勉強に入っていけるからである。

以上のことから、ディクトグロスとは、できれば日本語学習機関において、あるいは、遅くとも大学1年次の前期の段階で取り入れたほうが、より効果的であると言えよう。

3. 先行研究

桑戸（2007）は、「ディクテーション・ディクトグロス用コンピュータ教材」を開発し、授業に取り入れている。ディクトグロスの教材化を日本語教育で行ったのは、現在のところ、桑戸のものが唯一であろう。ただ、「ディクテーション・ディクトグロス用コンピュータ教材」とあるように、純粋に

ディクトグロス用の教材とは言えない。

例えば、この教材には聞く回数を制限するシステムはなく、桑戸が行っている実際の授業も、一人一人個別にコンピュータに向かわせ、自由に音声を聞かせている。しかし、本来、ディクトグロスでは聞く回数を制限してメモをさせ、その後、そのメモを元に文章を全文復元させるものであり、桑戸の授業のように、聞く回数に制限を設けていない（時間の制限は設けている）ならば、全文ディクテーションの授業と何ら変わりはない。ただ、その後、同じ問題に取り組んでいる隣の人とペアになり、どちらか1台のコンピュータを使い、更に文章を復元させる作業を進めさせているので、純粋にディクテーションの授業とも言えない。言わば、ディクテーションとディクトグロスの折衷授業のようなものであると言っていい。もっとも、「本教材は、ディクトグロスのアイデアを取り入れ、筆者らが開発したものである。しかし、これまで実践されてきたディクトグロスをコンピュータ上で忠実に再現することだけを目的としたものではない。使用者が目的に合わせ、自分自身で聞く回数および人数を調整することにより、ディクトグロスとしても、ディクテーションとしても活用できる」と教材の説明にあるので、桑戸が行っている授業のような使い方もあるのだろう。

ただ、そうなると、授業において「ディクテーション・ディクトグロス用コンピューター教材」を使用した学生にアンケート調査を行い分析し、その利点を述べた部分は、ディクトグロスとして有効なのか、ディクテーションとして有効なのかがわからない。

また、この教材は、桑戸らが作成した初中級、中級、上級の3レベルに対応した問題がそれぞれ17問ずつ用意されている。（ただ、教師が学習者に合う問題を自分自身で作成することもできる）そして、それらの問題における語彙の難易度については、語彙総数100に対する日本語能力試験3級および4級の語彙の占める割合が90%以上のものを初中級、80%以上90%未満を中級、80%未満を上級としている。しかし、どうしてこのような基準でレベル分けをしたのか、その理由が示されておらず、この教材における語彙の難易度の妥当性がわからない。よって、今後、教材を作成する際は、上記の点を改善する必要があるだろう。

なお、コンピュータが使えない環境でも手軽に授業で使えるように、教材は、紙媒体での出版化が望ましいと思われる。

4. 教材作成の基準

ここでは、文型シラバスを元にした教材を作成する場合について考えていきたい。

まず、教材のレベルだが、染谷は、初級の学習者対象にもディクトグロスの授業を行っている(5)ので、初級の学習者対象にも可能だと思われる。(ただし、その場合、共同で内容を検討する際のメタ言語は、日本語では難しいものと思われる)しかし、一方で、染谷は、ディクトグロスは特に中級以上の学習者にとくに有効な学習方法あると考えられるとしている(6)ため、ここでは中級以上の学習者対象の教材を作成する場合について考えることとする。

次に、教材における語彙の難易度だが、ここで参考となるのは、文章理解を促進する既知語率の閾値である。小森他(2004)は、この閾値が、日本語の場合96%であると推定している。ということは、文章全体に占める既知語が96%あれば、特別な支援を受けずに(つまり、辞書を引いたり、他の人に聞いたりといったことなしに)文章理解ができるということである。もちろん、この閾値は、読解におけるものである。しかし、ディクトグロスの教材作成においても、重要な数字であると言えよう。なぜなら、ディクトグロスを行う際、未習の語が多く、学習者が課題文を聞いた(聴解)段階(インプットの段階)で、何を言っているのか十分に分からない状態では、メモも十分に取れず、結果、文章復元などできるわけがない。つまり、同じインプットでも、自分のペースでインプットできる「読解」でさえ、既知語が96%なければ、十分な文章理解はできないのであるから、「読解」に比べ、自分のペースでインプットできない「聴解」の場合は、既知語が96%なければ、なおさら十分な内容の理解はできないであろう。

以上のことから、ディクトグロスの教材化にあたって、以下のような基準が考えられる。

文型シラバスを元にした教材を作成する場合

レベル	対象者	語彙	文型
中級レベル	現在中級レベルの学習をしている学習者	未習語（日本語能力試験 2 級レベル以上の語）が 4 % 以内、既習語（日本語能力試験 3 級レベル以下の語）が 96 % 以上。	日本語能力試験 2 級レベルの文型を 1 問につき 1 つ
上級レベル	現在上級レベルの学習をしている学習者	未習語（日本語能力試験 1 級レベル以上の語）が 4 % 以内、既習語（日本語能力試験 2 級レベル以下の語）が 96 % 以上。	日本語能力試験 1 級レベルの文型を 1 問につき 1 つ
超級レベル	現在超級レベルの学習をしている学習者	未習語（日本語能力試験 級外レベル以上の語）が 4 % 以内、既習語（日本語能力試験 1 級レベル以下の語）が 96 % 以上。	日本語能力試験 試験範囲外レベルの文型を 1 問につき 1 つ

5. まとめ

今回は、ディクトグロスを文型シラバスを元に教材化するにあたっての基準を示したが、教材化するにあたっては、まだ多くの課題が残る。

最後に、今後の課題をあげておきたい。

1. 課題文の長さは、レベル別にどの程度の長さが適当か。
2. 中級、上級レベルの教材を作成する場合、日本語能力試験の文型のうち、どの文型を選べばいいか。
3. 超級レベルの教材を作成する場合、どういった文型を使えばいいか。

4. 現在の日本語能力試験の基準を元に作っても、2010 年度以降、レベル分けも出題基準も変わってしまう(7)。そうすれば、現在の日本語能力試験を元に教材を作っても、改定後、作り直す必要が生じるのではないか。

以上の課題を含め、今後、引き続きディクトグロス用教材作成に向けて、研究を進めていきたい。

<注>

- (1) Wajnryb, R. (1990) *Grammar Dictation*. Oxford : Oxford University Press. からの引用による定義である。
- (2) 2008 年 3 月 3 日、聖トマス大学において第 2 回 CALL ワークショップが行われ、染谷泰正青山学院大学文学部英文学科教授が『「プロダクション能力養成のための訓練法—通訳訓練法の創造的応用事例およびその理論背景」～シャドーイング、ディクトグロスを中心に』というテーマでワークショップ、講演を行った。その際、配布されたレジュメのうち、パワーポイントをコピーした部分からの引用である。
- (3) Wajnryb, R. (1990) *Grammar Dictation*. Oxford : Oxford University Press.
- (4) (2) と同じレジュメだが、そのうち「ディクトグロスのやり方」という部分からの引用である。(下線部も染谷)
- (5) (4) で引用した「ディクトグロスのやり方」という部分の最後に「※初級編 90 分授業を想定」とある。
- (6) (2) と同じ。
- (7) 2008 年 6 月に、「第 2 回日本語能力試験改定中間報告」が行われ、それによると、2010 年 7 月より日本語能力試験は、改定され、問題の形式も、レベル（従来は 1 級から 4 級の 4 レベルであったが、改定後は N 1 ～ N 5 の 5 レベルとなる）も全面的に変わる。なお、問題は、2010 年以降、非公開となるため、出題基準も非公開となる可能性がある。

http://www.jees.or.jp/jlpt/pdf/20080525_jlpt_kaitei_report_pre01_0718.pdf

資料（染谷が使用している実際のワークシートとは Text Reconstruction の
行数が違う）

Dictogloss Worksheet Unit No : _____

Date : _____ Name : _____

Notes	Text Reconstruction

<参考文献>

- 桑戸孝子(2007)「ディクテーション・ディクトグロス用コンピュータ教材の開発と実践」『日本語教育』135号 90-99
- 小森和子・三國純子・近藤安月子(2004)「文章理解を促進する語彙の量的側面」『日本語教育』120号 83-92
- 森朋子(2005)『大学教育における「アカデミック・ジャパニーズ」を考える』『東京家政学院大学紀要』第45号 117-122
- 横山紀子(1998)「言語学習におけるインプットとアウトプットの果たす役割ー効果的な「気づき」を生じさせる教室活動を求めてー」『日本語国際センター紀要』8, 67-80

(京都経済短期大学非常勤講師)